

第1章 福島県調査団派遣

○福島県調査団メンバーとしての活動

教育の復興に新しい構想を

理事(教育・学生担当) 寺岡 英男

今回私が調査団に参加したのは特に以下の目的からだった。1つは、夏休みを中心に予想される学生のボランティア活動派遣と関わって、現地の状況を実際に見るとともに、特に県の派遣制度を利用した場合の支援先の1つである石巻まで足を延ばし、受け入れ先と相談を行うこと。2つ目は、福島大学を訪問し、本学保健管理センターの細田准教授が6月に福島県立医科大学「こころのケア・チーム」に参加し調査に入る予定があり、福島大学の専任教員の方々への協力依頼を行い、併せて人間発達文化学類の学類長さんたちと教育の面での取組支援について話をする。3つ目は、リトアニアの子どもたちから送られた折り紙のパネルについて、届け先の仙台市教育委員会を訪問しお礼と交流を行うこと。

紙数が限られているので、上記の目的に沿って報告させて頂く。5月24日午前中は調査団の一員として相双地方に入り、昼過ぎ県庁での知事との会見に加わった後、私たち（高梨理事、北島係長、嶋津係長と私）はすぐ福島大学へ。嶋津係長と私は人間発達文化学類で中田学類長とお二人の評議員の方々にお会いした。中田学類長からは、子どもたちの避難先も、避難所とか仮設住宅など多様で、それに対応した支援が求められること、中高校生の一部は非行に走っている状況もみられるこ

と、学類としては、教員の車に学生を乗せて支援に行っていること、弱者である子どもたちの支援・教育の支援がおろそかになっていて、対応が求められていることなどをお聞きした。同時に、教育の再建について行政や住民も巻き込んだプランを構想していく必要があるが、まったく新しい枠組みでの発想が求められ、専門家としていかに応えて行くことができるのか、これまでにない課題に直面しているということをお聞きした。

夕方、北島係長、嶋津係長と私は仙台泊。翌朝、レンタカーを借り、まず仙台市役所の教育局学校教育部に。浅妻指導主事と藤森主幹にお会いし、リトアニアから送られた折り紙のパネル展示のお礼を述べ状況を伺い、折り紙が展示してある1階ホールに。この折り紙は、リトアニアのある小学校の1年生が折って送ってくれたもので、190羽それぞれに子どもたちのメッセージ、中央には「子どもたちが、日本の子どもの皆さんにツルを折りました。これらのツルが、日本の幸ある未来への希望となりますように。どうぞこの折り紙と私どもの思いを、日本の子どもの皆さんにお届けください。」と結ばれた校長先生のメッセージも貼られている。

このパネルが遠く仙台に届けられた経緯を説明しておきたい。福井大学教職大学院は、フィンランドの研究者夫妻と交流をもっているが、夫人はリトアニアの首都ヴィリニウスの出身で、その幼稚園や小学校と共同研究を行っている。一昨年私たちのフィンランド訪問の際、一緒に行った前教育地域科学部長の黒木先生たちは日程の前半にヴィリニウスを訪問した。参観した小学校1年生の子どもたちに折り紙を教えたが、その子どもたちが、東日本大震災を知って、ツルを折り日本に送ってくれた。福井の教職大学院のスタッフの一人が仙台で自動車道路を挟んで津波災害を免れた地区の出身で、5月の連休に実家に帰省したと



き持って行ってもらったのが、このパネルだった。(このヴィリニユスの子どもさんたちは、夏にまた再び折りヅルを送ってくれた。これは福島大学の中田学類長にお願いし、福島市内に避難している子どもたちを多く受け入れている学校に届けていただいた。)

その後私たちは石巻に。市内に入っても最初は普通の日常的な光景だったが、ボランティアセンターの置かれている石巻専修大学に向かうため、旧北上川に架かる橋の方に行くにつれ被害の甚大さを痛感させられた。橋を渡り、巨大な瓦礫の山と、反対側の広い運動場に設けられた自衛隊の救援基地の間を抜け(基地に隣接して、大きな仮設住宅の建設が始められていた。)石巻専修大学に。広大な運動場に張られたボランティアの人たちの夥しいテントを見ながら、校舎内にある石巻市災害ボランティアセンターの事務所では副総括の佐藤さんから丁寧な応対を頂いた。今後石巻でのボランティア支援は、瓦礫や泥土の除去などの肉体的な作業から、子どもや住民といっしょになっての楽しい活動づくりを組織することなどに転換していくことが求められてくる。その点で、特に若い学生の支援が要るが、状況や課題も変わってくるので、夏の学生ボランティア派遣の際は、直接このセンターと連絡を取ってほしいとのことだった。(夏の学生ボランティア派遣は、県の派遣枠の関係で陸前高田となったが、佐藤さんには嶋津係長が連絡をとらせて頂いた。)

被害が一番大きかったという漁港のある海岸線を回りたいと言うと、通れるようにはなっているが、マスクをしていても魚等の腐敗した匂いがひどい、その辺りはまだ手が付けられていないということだった。道を引き返し、旧北上川を渡って市街地に入り海岸線に。市街地は、泥土の除去は一段落したのか、泥土を入れた袋が至る所に積まれていた。家々の津波による壊れ方もすごく、その中に運ばれた大きな漁船が被さっている様。腐敗した匂いもひどかった。交通規制をしている海岸線の道路に出ると車窓の左右は、巨大な魚加工工場群が鉄骨の骨組みだけ残して林立していた。道路を東から西に走る。目にする建物も魚加工場から生産工場群に、そして住宅地区へと変わっていったが、津波にさらわれた片付けも進められ何も

ない光景だった福島の相双地区とは違って、大きな都市の石巻は巨大な工場やまだ手が付けられていない住宅群という光景だった。

福島・宮城の視察で強く印象に残ったのは、私の専門と関わるが、福島大学中田学類長の、新しい枠組みでの発想が求められる教育再建プラン。家族も、家も、職も、友人も、そして地域も失った人たちが関わる課題。敗戦後、お金がなく、新制中学を建てるのに先祖が代々大事にしてきた神社の御神木を売った所もあったという。しかし地域はそこにあり、学校を建てた。福島の場合は状況が違う。どう進めて行くべきなのか、どう関わられるのか、問われ続けられている。